

パルシステム東京 震災復興支援基金「パル未来花基金」助成活動レポート

震災復興支援基金「パル未来花基金」の助成を受けて、復興支援活動に取り組みました。その取り組みについて、組合員の皆さんにご報告します。

グループ名	NPO 法人 福島こども保養プロジェクト@練馬 記録グループ
支援対象者・エリア	福島県
企画開催地	東京都練馬区、埼玉県飯能市
企画名称	福島のこどもたちの保養キャンプなど1年の活動報告集作成事業
実施期間	2019年4月1日～2020年3月31日（主に8月の保養キャンプ時に実施）

支援活動の目的・内容・感想

（どうしてこの活動をはじめたのか、どのようなことに取り組んだのか、取り組んだ感想など）

（目的）

2011年の東京電力福島第一原子力発電所の事故後、福島県をはじめ放射線の高い地域に暮らしているこどもたちに、少しでも線量が低い地域でたっぷり外遊びをしてもらい、心身のリフレッシュをはかってもらいたいと考えている練馬区民が集まり、任意団体として2011年6月に設立。その後、より継続的な活動をするため、2013年9月に法人化した。

（今年度の取り組み）

2019年の5月には、保養キャンプの実施場所である埼玉県飯能市の大平ハウスへの下見と、保養キャンプ実行委員会を立ち上げ、6月には福島県内での保養相談会で参加者の募集を行い、また南相馬市の子育て支援センターを通じて呼びかけた。保養キャンプにそなえ、実行委員会を重ねた。

8月2日～6日、9日～13日に合計11組38名が保養キャンプに参加。その後は写真や映像記録（動画）などを完成。また、9月から翌年3月まで、1年の活動報告をまとめた団体の報告集を作成するために、編集会議を重ね、3月21日に2500部印刷完了。キャンプ参加者・キャンプなどの協力者・支援者・会員・賛助会員などに報告集を配布、発送した。

（取り組みの感想）

2019年で9回目となる保養キャンプとなったが、地元の自治会の皆様との協力もあり、福島県から親子をお迎えして、無事に実施できた。また、準備段階から若い20代のボランティアが企画をすすめ、次世代へつなぐ「保養」であるという意識が共有できた。

報告集作成にあたっては、NPO法人福島こども保養プロジェクト@練馬の活動を多くの人に知ってもらい、原発事故を風化させないために、記録をきちんと残していきたいと考える。

キャンプを始めてから9年がたち、参加者の想いもさまざまで、参加者とのやりとりの中で複雑な現実をしばしば感じさせられている。保養キャンプの後、2019年秋の台風による水害にあわれた方も多く、そのような二重の被害に苦しむ方がたへ、練馬区大泉学園町にある滞在型保養ハウス「さかさい」の利用などの声かけができたことは良かった。

また、今年の2月に行われた講演会「10年目の福島をきく 震災・原発避難者はいま Part5」では、避難者が抱えている現実を受け止めつつ、取り組みを続けていることの意義も確認できた。

※別紙に冊子添付

2019 報告集

飯能サマーキャンプと
練馬でのとりくみ

NPO法人 福島こども保養プロジェクト@練馬

キャンプにご協力いただいた方々 (敬称略・順不同)

明星 晃・マサ (大平ハウス・大平岩男元後見人)
大久保 勝 (飯能市長)
須田隆行 (飯能市企画情報戦略課)
飯能市役所観光・エコツーリズム推進課+生活福祉課
藤田純久 (さわらびの湯)
佐野敏雄 (飯能市中藤下郷自治会長)
久下高司 (飯能市中藤中郷自治会長)
大野隆司 (飯能市中藤上郷自治会長)
本橋憲一郎 (飯能市中藤中郷自治会・中藤子ども未来プロジェクト委員会顧問)
水野 潔 (飯能市中藤下郷自治会・中藤子ども未来プロジェクト委員会顧問)
新井勇吉 (飯能市中藤上郷自治会・中藤子ども未来プロジェクト委員会会長)
細田好信 (飯能市中藤下郷自治会・中藤子ども未来プロジェクト副会長)
西川幸夫 (飯能市中藤離子連会長)
地元自治会 (中藤下郷・中藤中郷・中藤上郷) + 中藤子ども未来プロジェクト委員会 + 中藤離子の皆さん
坂田正義・美華 (釣場の川原提供)
風間 操 (こころ座・お話)
成田純子 (はんのうきときとひろば)
武田竹史 (株式会社ハンモク)
クラウン・ワン・ジャパン (遊びボランティア)
清水和美 (ドラムサークルファシリテーター)

サポートいただいている団体 (順不同)

練馬区社会福祉協議会
練馬区立区民協働交流センター

環境まちづくりNPO 元気力発電所
日本基督教団大泉教会
社会福祉法人つくりこの家
江古田映画祭実行委員会

ギャラリー古藤
大泉学園町親交会
大泉スワロー体育クラブ
オリエンタルハート

辻格と子の仲間たち
チェルノブイリ子ども基金
ダキシメルオモイ
in WAKO 実行委員会

ボランティア

青木里子・れあ (東久留米市)
青木重典 (豊島区)
青木節子 (東久留米市)
青木 良 (東久留米市)
浅野里香 (和光市)
安藤丈将・草太 (東大泉)
安東洋子 (大泉学園町)
生田 礁 (田柄)
生田希海 (田柄)
生田美樹 (田柄)
池尻祐子 (三原台)
石田ナオミ・あずみ・あんな (旭町)
伊丹 高 (石神井台)
岩竹裕美 (台東区)
内山恵・栄美・亜美・葉耶 (UAE)
大石洵嗣 (柏市)
大内美南 (豊玉北)
大川春音 (北町)

大城さら (東大泉)
大城資子 (東大泉)
大角香里 (豊島区)
大富 啓 (光が丘)
大矢 聡 (石神井町)
奥田富美江 (光が丘)
小河原直樹 (東村山市)
角田一樹 (土支田)
角田志麻 (土支田)
片野令子 (東大泉)
金本麻理子 (港区)
釜島照実 (柏江市)
加茂孝子 (飯能市)
川合未起 (板橋区)
狩野忠志 (谷原)
喜多浩子 (西大泉)
北島恵美 (八王子市)
君垣圭子 (西大泉)
木村遥香 (ふじみ野市)
工藤雅代 (石神井町)

楠原賢二 (青梅市)
国島さなえ (豊玉北)
国島政雄 (豊玉北)
高口陽子・幸成・佐都 (小竹町)
古賀広起 (北足立郡伊奈町)
作山友芽 (市川市)
佐藤 光 (横浜市)
里見文歌 (大里郡寄居町)
塩匠匠 (富士見台)
四戸恵理子 (東大泉)
四戸 潤 (東大泉)
下川真史 (葛飾区)
代田彩月 (豊島区)
菅沢 博 (南大泉)
杉里直人 (西東京市)
鈴木美佳 (豊島区)
高島智美 (大泉学園町)
竹内尚代 (東大泉)
田中和馬 (川口市)
田中広美 (日高市)

田中まどか (日高市)
田淵英生 (関町南)
田宮雅子 (日高市)
丹野太郎 (大泉町)
丹野真由美 (大泉町)
CHO JIEUN (文京区)
土田悦子 (西東京市)
富田嵩子 (東久留米市)
戸谷克己 (飯能市)
中川信明 (北町)
中村紗絵 (千葉市)
野村知之 (大泉学園町)
萩野由美子 (日高市)
橋本龍子 (豊玉上)
橋本恵子 (南田中)
長谷川順子 (飯能市)
林 明雄 (小竹町)
日高美南子 (東大泉)
福田和美 (野田市)
福原結衣 (西東京市)

福山啓子 (豊島区)
藤村喜久子 (東大泉)
古軸 泉 (江東区)
松田光寿 (杉並区)
松本旬子 (大泉学園町)
三井由美 (石神井台)
三輪晴香 (北町)
宮下智行 (光が丘)
目黒恵子 (飯能市)
本橋慧子 (西東京市)
本谷 瞭 (東大泉)
桃谷修汰 (西東京市)
森川春菜 (江東区)
柳井克子 (関町北)
山川由紀子 (土支田)
山家直子 (氷川台)
横澤雅代 (石神井台)
吉田寛人 (東大泉)
吉原 功 (板橋区)
渡辺由美子 (栄町)

2019 報告集

飯能サマーキャンプと練馬でのとりくみ

2020年3月末日発行
NPO法人福島こども保養プロジェクト@練馬
〒178-0063
東京都練馬区東大泉 6-36-4-301 大城気付
Eメール: hoyou.npo.nerima@jcom.home.ne.jp
Facebook: 福島こども保養プロジェクト@練馬
https://www.facebook.com/hoyounerima/

郵便振替口座 00100-4-300449
加入者名 福島こども保養プロジェクト@練馬

編集委員/青木節子、伊丹高、四戸恵理子、竹内尚代、土田悦子

サマーキャンプ会計報告 2019年度 (2019年4月~12月)

収入	助成金	671,050円	水道光熱費 (大平ハウス他) 50,000円
	寄付金	814,090円	備品消耗費 (食器・キャンプ材料他)
	食費カンパ	89,800円	204,190円
計		1,574,940円	通信費 (参加者・ボランティア等) 16,981円
			下見費用 (5月6月7月) 29,378円
支出	食材費	364,907円	車両費 (運転手謝礼・ガソリン/高速/レンタカー代他)
	保険料 (参加者・ボランティア保険)	37,000円	647,456円
	会議費 (会場費・コピー代金)	42,611円	コンプライアンス費用 (AEDレンタル他)
	謝金・活動材料費		18,080円
	(思い出の絵・ドラムサークル等) 55,800円	計	1,466,403円
		残金	108,537円

ご寄付をありがとうございました。支出に報告集作成費用は含んでいません。残金はNPO法人会計に繰り入れ大切に使用させていただきます。長く保養活動を続けられるよう、引き続き皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

表紙イラストデザイン/高砂 航 本文デザイン・DTP/柳 裕子 写真/生田美樹、生田希海、田淵英生

2019

年の報告集をお届けします。夏の保養キャンプの他、練馬区内での「保養ハウス」の運営、被害の現状を学ぶ講演会などの活動をまとめました。

原発事故直後に始めた保養キャンプ活動は9年目を迎えました。キャンプ地の皆さま、いつもあたたかく見守っていただきありがとうございます。

今年は、滞在先の「大平ハウス」が大規模改修され、より多くの親子を受け入れる事ができました。お父さんの参加人数が増え元気で活発なキャンプでした。飯能・日高地域からも朝食作り・川遊びボランティアの参加が増え心強かったです。恒例の「中藤こども未来プロジェクト 七夕まつり」にも参加させていただき、若者ボラがリードするゲームでは、地域をこえて混ざり合い楽しいひとときでした。

キャンプをきっかけに新たに加わった若いメンバーを大切にして、団体としての世代交代も考えていく時になったと感じています。ひきつづき応援をよろしく願います。

最後になりましたが、設立当初からの代表理事竹内尚代から今回バトンを引き継ぐ事になりました。よろしく願っています。

NPO法人福島こども保養プロジェクト@練馬

代表理事 大城資子



前半日程

福島こども保養プロジェクトに寄せて

ようこそ、飯能市へ。

今年も、緑と清流に囲まれた飯能市で、こども保養キャンプを開催いただきありがとうございます。

飯能市でのキャンプの開催は今回で9回目となり、キャンプ地として選び続けていただいていることを大変嬉しく思っております。

ワクワクすること、ドキドキすることをたくさん経験され、あつという間の時間だったのではないのでしょうか。初めて会った人との交流や、仲間と共に何かを成しえたときの喜びは忘れられぬ宝物となり、短期間で心も体も大きく成長されたことでしょう。

来年もまた、皆さんが飯能市に来てくれることを楽しみに待っています。

飯能市長 大久保勝



後半日程

相互理解が生まれた七夕まつり 参加に感謝

今年も真夏（8月4日）に開催した七夕まつりは福島市の皆さんをお招きし、地域の人も一体となり、中郷の自治会館で開催しました。

まつりは、午後4時ごろから思い思いの願いを書き込んだ短冊を作り3本の竹に全員で飾り付けを行いました。その後、食事しながら地域を越えた和やかな会話も進み、有意義な時間を過ごしました。まつりの後半は、福島こども保養プロジェクト@練馬の方から提案頂いたゲームを全員で行い、子ども達と大人の皆さんも参加した事で、観ていた人達の応援も加わり、全員の心が一つになり、祭りが最高に盛り上がりました。苦難ある状況の下で、スタッフの皆様を始め、遠方の福島市の皆さんに参加して頂き、楽しい七夕まつりになりました。

また来年もお会いできるのを楽しみにしています。

中藤こども未来プロジェクト委員会

会長 新井勇吉

サマーキャンプ実施にあたり、以下の皆さまより助成をいただきました。心より感謝申し上げます。

独立行政法人国立青少年教育振興機構『子どもゆめ基金』／子ども被災者支援基金／連合・愛のキャン／公益信託加藤一枝記念福祉奨励基金

また、この報告集はパルシステム東京震災復興支援基金『パル未来花基金』の助成を受けています。ありがとうございました。

飯能市の空間放射線量
市内の公園施設 13 施設 測定地点 17 地点 測定値の評価
地表 1cm上
0.05-0.10 μ Sv/h の範囲で 1 μ Sv/h を越える箇所はない
地表 50cm上
0.05 ~ 0.10 μ Sv/h の範囲で 0.23 μ Sv/h を越える箇所はない
《調査日 2019/8.6-7》飯能市「放射線ニュース 2019.9.9」より

今年も暑い！ でも、遊びまくった 4泊5日

前半日程

8月2日（金）～6日（火）

- 1日目 はじまりの会 プレパーク ところ座のお話
- 2日目 川遊び 癒しの時間 健康相談 バーベキュー 星空シアター
- 3日目 川遊び 流しソーメン 癒しの時間 健康相談 クラウンと遊ぼう
- 4日目 はんのうきときとひろば木育サロン さわらびの湯 エコバックつくり 花火 キャンドルサービス
- 5日目 思い出の絵 おわりの会



日がくれたら新しくなったお庭で星空シアター開始



川のおじさんに
網の使い方教えてもらって、
何がとれているかな？



みんなと食べる冷たいかき氷がおいしい！



夢中で話聞いている



中郷の皆さんとの七夕祭。
お神楽とお囃子見せていただきました



きときとひろばのお店開店中！



今日も子どもたちといっぱい遊びます！



キャンドル手作り中



クラウンたちが
大平ハウスに来てくれました。一緒に遊びましょう



思い出満載で帰ります。また会いましょう！

後半日程

8月9日（金）～13日（火）

- 1日目 はじまりの会 プレパーク 花火
- 2日目 川遊び バーベキュー 星空シアター
- 3日目 川遊び 流しソーメン 癒しの時間 健康相談 ところ座のお話
- 4日目 はんのうきときとひろば木育サロン ドラムサークル 花火 キャンドルサービス
- 5日目 思い出の絵 おわりの会



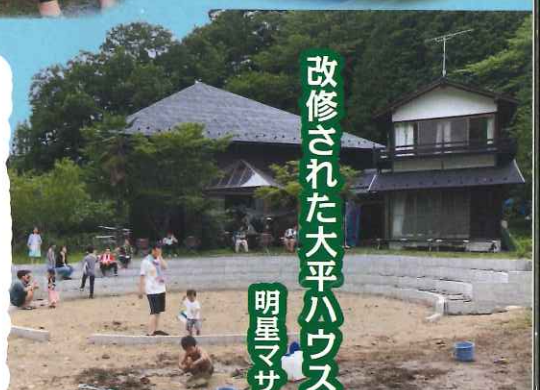
みなで太鼓をたたいたね！



大きなお鍋にみんなびっくり！



サプライズ誕生会！
おめでとうおめでとう！



改修された大平ハウス
明星マサ

大平ハウスは故大平テルさんが、ダウン症の息子岩男さんが施設から一時帰宅したときにすこす場としてつくられたものです。岩男さんが、新聞ちぎりが大好きで動きも活発な頃に、安全が守られ心ゆくまで楽しめるようにと、リピングからも様子がみえるように設計されました。

テルさんは、岩男さんだけでなく様々なハンディのある人やその関係者などが、気兼ねなくゆつくりとくつろげる場として活用してほしいとの想いをもっておられました。

これまで幼い子どもたちや「障害」のあるひとたちなど、多くの方々に利用していただきました。

広い庭で遊びまわって保育園児たちはポニーと一緒にのんびり楽しめました。山あいの静かな環境は、ふだん幻聴に悩まされている人に「きこえてこない」やすらぎの時間を与えてくれています。

そして、2012年からは福島の子どものための保養の場として使っていたいただいています。

オーナーであった岩男さんは、2016年3月11日に肺炎で58年の人生を閉じました。

その後もこれまで利用してくださった方々の熱い思いと大平テルさんの遺志に後押しされ、使い続けられるようになりました。その上、大勢の方がもっと気持ちよく使えるように設計士のアイデアと大工さんのご苦労によるリフォームで、部屋が増え、洗濯場も整えられ、デッキの屋根や庭の補修ができました。

これからもより快適に過ごして頂けるように、整備の役割を担っていきたくとおもいます。



キャンドルに灯をともして、最後の夜が静かにふけていきます



花火きれい！

参加された皆さんから

アンケートより抜粋

たくさんの思い出が宝物に

K・H（いわき市／A5歳）

妻が幼稚園からチラシをもらって来ました。

日程がちょうどよかったので参加。いろいろなイベントを企画していただき、親子とも楽しみ、たくさんの思い出が宝物になりました。スタッフの皆さんには、父親の私のことまで気づかっていただき、お世話になりました。次回もよろしく願います。

もっと長くてもよいくらい

Y・H（いわき市／Y6歳、A4歳、K2歳）

保養相談会で、小さな子ども向けの保養と聞き参加。マッサージ、ネイル、エステ、おいしいご飯と至れり尽くせりでした。子どもたちは、川あそび、流しそうめんが、特に楽しかったようです。ホームシックになることもなく、もっと長くてもよいくらいでした。しっかりと考えられたプログラム。そして、ひとりひとり

にボランティアさんがつき、そのスタッフ全員がボランティアと聞いて、びっくりしました。来年も参加させてください。

これからもつながっていききたい

三浦 順子（南相馬市／ゆあ5歳、まな4歳、ゆうき2歳、はるな12歳）

今回も声をかけていただき参加。すべてのプログラムが充実していて、なかでもバーベキューがよかった。川遊びでは、私の方が楽しませていただきました。保養を通して、子どもたちの成長を感じる事ができました。

スタッフの方々とたくさんお話ができ、大平ハウスファミリーの一員になったように感じました。毎晩の夜の会は、大切な思い出です。これからも何らかの形でつながっていききたい。できればボランティアとして参加させていただきたいと願っています。また皆さんにお会いできることを楽しみにしています。

子どもにさせたいあそびや学び

荒川 梓（いわき市／はなの5歳）

保養相談会で説明をうけ参加。福島で生活していて、子どもにさせたいあそびや学びを、五日間の中でたくさん経験させていただき、忘れられない夏休みになりました。私自身も、多くのボランティアさんとの生活の中で、心もからだもリフレッシュし、学ぶ事もたくさんありました。これからも保養に参加して、子ども

にいろいろ経験してほしいと思います。そして、大平ハウスの皆さんと福島の親子が、これからもつながっていきますようお願いしています。



子どもから少し目を離せてうれしい

S・A（南相馬市／H8歳、S2歳）

南相馬市原町保健センターのワークショップで知り参加。たくさん遊んで、帰ってくるとおいしいご飯が待っている生活は、子供のころ以来で、とても心が安くなりました。子どもたちから、少し目を離すことができる環境がうれしくて、こんな時間をいただけたことに感謝。来年もぜひ参加したいです。

キャンプの前からワクワク

西村 ユウ子（南相馬市／ひろと2歳）

ワークショップで知り参加。自宅まで送迎があることが決め手でした。川あそびや庭あそびができ、お祭りにも近い。家も広く、こんな場所は他にないと思います。そして、むかし実家で食べていたような（家庭菜園からとってきたばかりのような）新鮮な野菜を使った料理が、おいしかった。さまざまな家族が参加し、親ごさんとの夜の交流会が、とても楽しい時間でした。キャンプの前は準備でワクワク、キャンプ中は友達とキャッキヤ、後は思い出をまとめてしみじみ。次は体力をつけて、すべてのプログラムに参加したいです。



将来ボランティアに関わるように

H・Y (二本松市／T7歳、H5歳)

保養相談会で知り参加。放射能から離れる機会を持つことは、これからも続けていきたい。若いボランティアスタッフさんの姿を見て、保養に参加した子どもたちも、将来ボランティアに関わるようになってくれたらいいなと思いました。

H・K

放射能を気にせずあそべることの、心のゆとりがありがたい。心が温かい方ばかりで、安心して参加できました。親子ともども、ボランティア側にまわれるように、成長していきたいと感じました。

大きく成長しました

A・T (郡山市／N8歳、N6歳、S2歳)

二回目の参加を、とても楽しみにしていました。ボランティアさんに助けていただき、いつもはできない遊びをたくさん体験できました。大きく成長しました。自分の欲しい物、したい事を伝えたり、遊びに誘ったりと、どんどん変わっていききました。親もゆつたり過ごす事ができ、料理や生活の工夫などを教えていただきました。

テレビの無い五日間、最高！

K・Y (福島市／Y6歳、A1歳)

友人から勧められて参加。大平ハウスの、のびのび遊べる庭や、エアコンつきの部屋がうれしかったです。

K・H

思いっきり充実した非日常を味わいました。とくに川あそびが思いっきりでき、親のわたしたちも楽しめました。娘はすぐに「来年も絶対行こうよ!!」というくらい毎日が大満足だったようです。たくさんのお兄さんやお姉さんたちとの交流の時間は、とても意味があったと思います。スタッフや若いボランティアさんの、優しさや心づかいには、感謝の気持ちでいっぱいです。これからまた福島で楽しく過ごすパワーをいただきました。

ママを癒してくれて

菅野 恵梨子 (福島市／めいり4歳、はるひ2歳)

前回参加者の方からの紹介で、初めて参加。不安な気持ちからのスタートでしたが、ボランティアさんがたくさんいて、子どもと遊んでいただき、ママを癒してくれて、食事までお世話され、至れり尽くせりでした。普段は好んで食べない野菜も、たくさん食べていました。ここでしかできない体験やあそび、たくさんの人たちと交流し、新しいお友達もできて、本当によかった。親も子も、すごくよい思い出ができました。来年もぜひ参加したいと思います。



*本文と写真はリンクしていません

幸せな気持ちになりました

K・A (福島市／R13歳、M10歳、A3歳)

去年に続き、とても楽しみにして来しました。今年は、よりワクワクイベントが盛りだくさんでした。なかでもバーベキューが、本当に楽しく、おいしく、おもしろかった。お兄さんお姉さんたちに、妹や弟のようにかわいがっていただき、笑顔でのびのびあそぶ子ども

二回しか参加できないという事でしたが、条件つき(例えば数年あいだをおく、何かボランティアをするなど)でもいいので、参加できるようにしていただけるとうれしいです。

A・N

子どもたちが楽しそうにしていたので、仕事さえなければ、もっと参加したかった。『子どもに笑顔を』の一点で、これからも続けていただけたらと思います。



2019 6/8・9うけいれ全国相談会に参加して

福島からの参加者募集

福島各地で保養相談会を実施する「311 受入全国協議会」は、2011年3月の東京電力福島第一原発事故のあと、全国で保養キャンプを実施している民間団体が集まってできたものです。以前は年に2回行われていましたが、昨年から予算の関係で年に1回となりました。今年は6月8日いわき市（浜通り）と9日二本松市（中通り）で開かれました。北海道から沖縄まで48のブースが出展し、参加者はいわき市136組・307名、二本松市89組・208名あわせて225組515名でほぼ昨年と同様でした。大きく昨年までと変わった点は、福島市・いわき市・二本松市が教育委員会の協力を得て、保育園や学校が相談会の案内を配布したそうです。初めて『保養』を知って参加された方やお父さんも参加の親子が印象的でした。行政が動くというのはとても重要だと思いました。

私たちの保養キャンプは、未就学児のいる家族を優先し、リピーターは2回までとし、初

めのキャンプを経験したら、他のキャンプに飛び立ってほしいと願っています。

毎年、福島各地から「311受け入れ全国相談会」で私たちのブースを訪ねてきて、キャンプの日程や内容を知り応募してきます。今年も、前半チームで3家族、後半チームで3家族が、ブースを訪れ飯能保養キャンプに参加されました。また、相談会で出会い、過去にキャンプに参加された方が紹介して下さった例もあり、『保養』がだんだん周知され広がっていく嬉しさがあります。反面、8年を過ぎ9年目になってもまだまだ『保養』活動を全く知らない家族も県内外に居られることを肝に銘じて、私たちができることは何か探っていく必要があります。

「相談会」の交流会で、松本に留学している高校生の言葉が心に残っています。

「福島は自分の故郷だが、遠く松本にいと福島の問題を忘れそうになるし、そばにいる松本の友人とも、福島の問題を話すことはない。けれど、自分はいつも、心の奥底にある。

復興は進んでいるのでしょうか？と問われても、心の底からそうだとは言えない。今日ここに参加して、全国から『保養』をやるためにこんなに集まってきた人たちがいる事がとても嬉しかった。」

未来を担う若い方、子どもたちのためにも、『保養』の活動が大切！という思いを新たにさせられました。

（青木節子）



首都圏保養交流会に13団体が参加

11月16日、首都圏の保養団体が集まって第7回目の保養交流会が開催されました。

2013年当初は中野（なかのアクション・福島子ども保養プロジェクト）の呼びかけで保養をやっている都内4区交流（中野・世田谷・杉並・練馬）として経験交流をしていました。2014年からは中野のキャンプ報告集会の後に交流会が設定されたので、23区周辺の団体にも広がりました。2017年からは担当を決めて回すことになり、今回は世田谷区の当番で、牛山元美医師（さがみ生協病院・内科部長）の公開講演もあり、13団体が集まる堂々たる交流会になりました。

16日の交流会は各団体から「自慢できること、失敗したこと」のお題が事前に出ており、私たちの団体はドアツードアの送迎、キャンプ地域のご協力があること、安心安全な食材をと、肉類は生協、被災地相互支援の意味で熊本から有機の野菜を取りよせていること、などを発表し

ました。13団体の発表はそれぞれ個性にあふれていました。

共通のテーマは2020年のオリンピックにどう対処するか、保養について福島の自主的な取り組みはあるか、学生ボランティアとの関わり、についてでした。オリンピックの日程にかかわらず実施しようと思っている団体が多く、福島の自主的な取り組みについては、FOE Japanの「ぼかぼかプロジェクト」が猪苗代にペンションを持っているので、それを利用して福島のお母さんたちが自主的に保養をやっているという報告がありました。学生ボランティアは大学生中心で、各団体の拠点の近くのいくつかの大学のサークルなどと連携していて、私たちの団体のような中・高校生が遊びボラとしてやっているのは珍しかったです。

その後牛山先生の講演がありました。「福島第一原発事故から8年8カ月過ぎて―臨床医からみた問題点&私たちにできること」と題し

た牛山先生の講演は多岐にわたりました。チェルノブイリ事故のあとのベラルーシと福島県の小児甲状腺がんの比較、福島「県民健康調査」の問題点、いまだ各所に残る放射能汚染で内部被ばくを受けている。未来のために何をすべきか。測定された食品を使った安全な食事、タバコやアルコールに気をつける、ストレス解消、十分な睡眠、安全な場所での適度な運動。もしもの時の安定ヨウ素剤の確保。何よりも自己を肯定し、周囲の人と繋がり、誰もが声を上げられる社会に、そして身近な議員さんに直接訴えて、社会を変えていくこと。「かくじやなくて、かねじやなくて、やっぱりこどもでしょ!」

充実した講演会でした。

牛山先生は受入全国の相談会には欠かさず参加して、福島のお母さんたちの相談にのつておられます。

13団体の保養キャンプの報告もあり、それぞれのユニークな取り組みが参考になりました。次回は「福島子ども支援・八王子」、それぞれの個性が光る交流会が楽しみです。

（竹内尚代）

今

年は実行委員として参加し、今まで川ボラの子の参加だった自分としては大躍進。今まで保護に対する自分のスタンスは、『出来たものから口出しをするべきでは無い』でした。つまり、思う事はあっても計画段階から参加して、初めて提案出来るものだと考えているからです。そして今年には委員会に参加できたので、まず準備段階の提案としてボラ募集の方法、集計、日程表の作成等に関する点で、係の負担の軽減とお手伝いが出来たと思う。しかし、最終目的は誰もが出来る作業にしていきたいので、その点、改善の余地は多分にあります。

次にボラ同士の繋がりを。

僕には1つ大きな後悔があります。数年前、ボラの子達が仲間内で固まっていた事にに対し、厳しく注意された事。彼女達の意識も甘かったと思うが、そこに至るまでのこちら側の声掛けは十分だったかと。これを踏まえ今年の試みとして、ボラ同士を繋げる意味で、全体会の際に各役割のボラで集まる時間を提案。その時間を遊びボラは、初参加の方達と打ち解ける為の時間として費やしました。お陰で川遊び当日はぎこちなさも無く、ボラの輪の中に馴染めたと感じます。また、新しいボラの方達には、自分達から声かけをする意識が、係を問わず受け入れる側の共通意識として持つことも大事です。

現在保護ボラの中間の年齢層が抜けている構成で、現状をどこまで維持し、いつまで続くかは、新しい人達の受け入れ、若い子達の育成に掛かっていると思います。

(下川真史)

眩

しい陽射しと青空、そして湧き上がる子どもたちの歓声。今年もこの時が来た。実感する一瞬を噛みしめながら大平ハウスの門をくぐりました。私が保護キャンプと出会ったのは今から4年前、同職の方に誘われたのがきっかけでした。初参加の印象は、ただ言われた事を言われた通りにこなすだけでした。キャンプ終了後なんとも不完全燃焼な気持ちの中、自己反省を行ない辿り着いたのは、この保護キャンプが何なのかも分からずただの『お客様ボランティア』だったという結論でした。学生時代はキャンプボランティアとして、出産後は子どもの成長に合わせPTA活動や地域の活動の企画・運営に関わり、多くの方と話し合いながら一つの目標に向かって成功させるという貴重な体験をし、いろいろ学んで参りました。私の保護での不完全燃焼の理由はまさにここにある。お客様ボラでは物足りない。その後は時間があれば保護とは何か、福島は今これから、私たちに何が出来るのか、そのことを考え続けて今に至ります。私にできることは多くはありませんが、私にしか出来ないことはあるはずだと考え行動しています。自称若者ボラのお母さん、痛いでの大胆メニュー、癒しの時間でのお喋り、どれも私にとってかけがえのない大切な時間です。ボランティアに参加するすべての人に『貴方しか出来ない事があります』『ボラが楽しくなければ、参加者も楽しくない』この言葉をこれからも熱く皆様に伝えていければ幸いです。

(釜島照実)

私

が保護プロジェクトに初めて参加したのは大学3年生の頃です。震災以降、自分にできることを模索していた時期でした。教育を専攻していたこともあり、子どもに関わることとなると参加を決意しました。参加にあたっては、自分が本当に役に立てるか、初対面の方と上手く関われるかなど、様々な不安がありました。大平ハウスに到着するとすぐに不安は消えました。笑顔いっぱいの子どもたちや保護者の皆さん、温かいスタッフの皆さんに迎えられほっとしたと同時に、大自然の中でどんな経験ができるのだろうと胸が躍りました。

あの日から4年の月日が経とうとしています。大学を卒業し社会人になり、就職活動などで参加できなかった年もありましたが、他のスタッフの皆さんの支えがあり、プロジェクトの情報は常に受け取ることができました。そして、2019年は再びキャンプに参加することができました。

今年度は福島から参加する子どもたちと地域の子どもたちが交流する七夕まつりで、ゲームコーナーの司会を務めました。イベントのリーダーを務めることは初めての経験で緊張しましたが、子どもたちやボランティアに参加した学生の笑顔を見て、大きなやりがいを感じました。これからも保護プロジェクトの一員として、自分のできることに全力で取り組んでいきたいです。

(木村遙香)

熊本農家からの野菜たち

熊本地震の時、地震でせっかく作った野菜たちが出荷できなくて、保護キャンプチーム田淵さんの友人、熊本在住の古閑さんが全国に野菜のネット販売をする取り組み「救縁段階ボラ」を始めました。それを田淵さんが取りよせてFacebookにアップしたのを見た竹内が試しに取り寄せてみたのがきっかけです。野菜たちの美味しいこと！

ちょうどキャンプで使う野菜の選択に困っていたこともあり、おまけに有機の野菜を調達して下さることとで、「被災地相互支援」の趣旨も込めて、お願いすることにしました。

2016年に始まったこの取り組みは、熊本各地の農家の方から珍しくそして美味しい野菜たちが届きます。

取りまとめをして下さる古閑さんと、関東から阿蘇に移住し、品質、種類、値段と、無農薬野菜の作り方から生産者の人柄まで知る富田さんのお二人が密に連絡を取りながら、集めて下さっています。農家の皆さんが送ってくださる野菜は、福島の子どものために、「おまけ」が多く(笑)、ブル

ベリーやジャガイモの一部はご寄付でした。荷物にお便りが入っていたりして、福島の皆さんに安全安心なものを食べてもらいたい、という熊本の皆さんの愛が詰まっています。

さらに江戸川区小

岩の「蕪村居」と

いう蕎麦屋さんで

は、福島の子ども支

援として熊本野菜を

「くまモンの野菜ボ

ウル」とうたい、売

り上げを、ご寄付下さ

っています。

野菜一つとっても

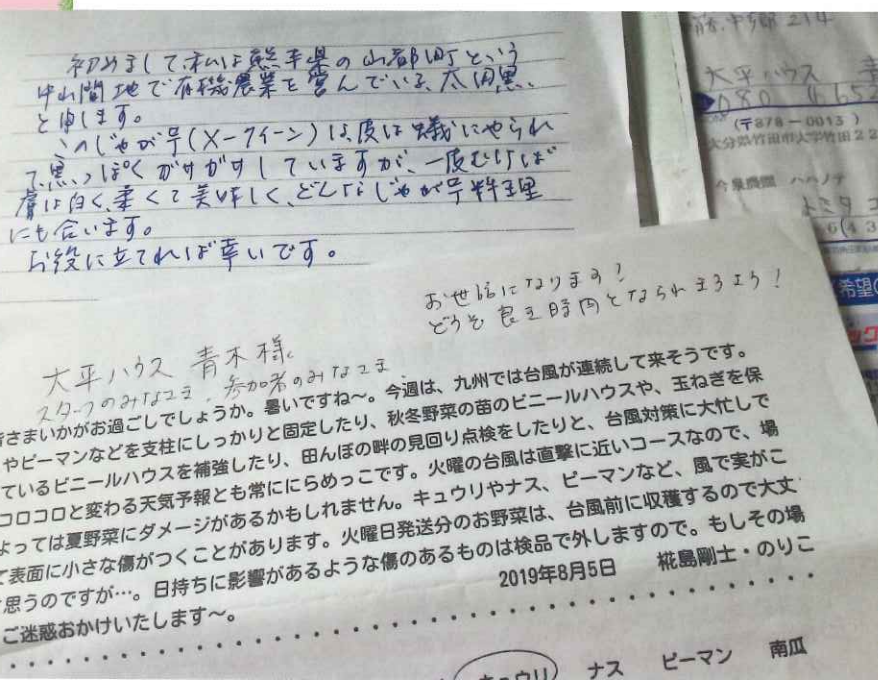
こんなに多くの皆さん

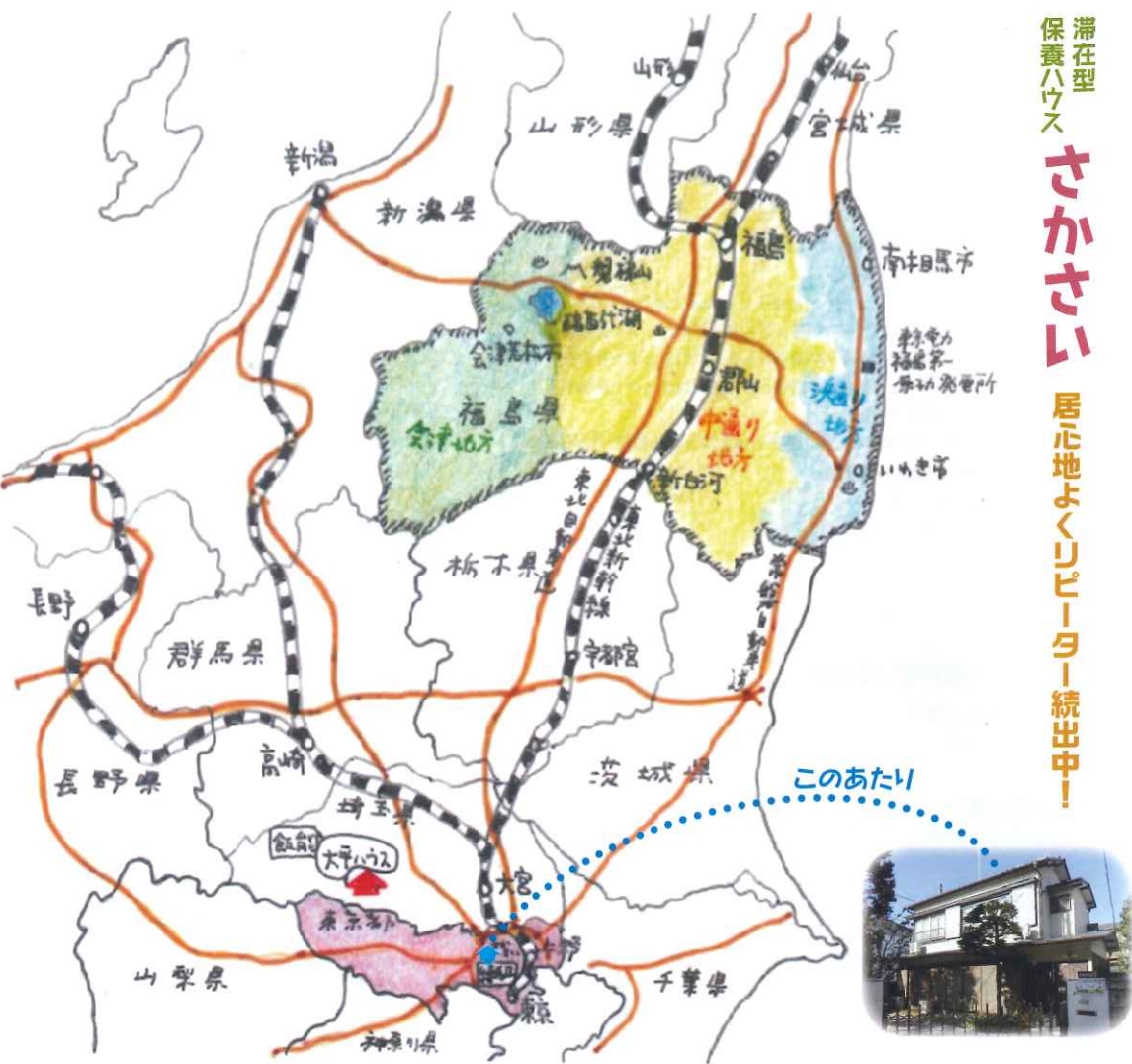
の支援の輪が広が

っていること、あり

がたいです。

(竹内尚代)





NPO 法人福島子ども保養プロジェクト@練馬の「通年型」保養施設として「保養ハウスさかさい」の活動があります。オーナーのご厚意により、東京外環・関越自動車道のICから近い、大泉学園町の二階建て軒家を提供しています。家族単位、二泊から一週間程度まで、幅広い目的でご利用になれます。年末年始から始まり、春休み、GW時期などには多くの問い合わせがあり、2019年の夏も、飯能での保養キャンプの時期を含む一か月半ほどは、多くの方々がさまざまな目的でご利用いただきました。現在世話人は8人体制ですが、スペースも広く、もっといろいろな使い方を提案いただき、実現できるといいなと願っております。

2019年10月に福島県に大型台風が襲い各地で浸水、断水の被害がありました。そこで、団体として今までのキャンプ参加者などを中心にお見舞いかたがた利用を呼びかけ、10月末に1組の利用がありました。やりとりのなかで、利用に至らなくてもいいという時に受け入れる場所があることは心強いとの感想があり、今後也非常時にでも対応できる場として役割を担っていきたいと思えます。

(野村知之)

滞在型保養ハウス さかさい

東京都練馬区大泉学園町（外環大泉出口より車で5分）／二階建ての一軒家、間取り5K+トイレ2+バス／台所用品、食器、寝具、家電等の備品あり。近隣に買い物場所や公園多数。利用方法等詳細は下記までお問い合わせください。
Email: hoyou.npo.nerima@jcom.home.ne.jp（件名に「保養ハウスさかさい」と明記してください）

震災・原発避難者はいま part 4, トーク&映像 原発被災者と保養のこれから

東日本大震災、東京電力福島第一原発事故から8年目を迎えようとする2019年2月9日に、『震災・原発避難者はいま part 4, トーク&映像 原発被災者と保養のこれから』を練馬区役所アトリウムで開催いたしました。

最初に、中川あゆみ監督「ふたつの故郷を生きる」を上映。その後、福島市から母子避難されて練馬に住んでいらっしゃる二瓶和子さんとチェルノブイリ子ども基金共同代表、未来のふくしま子ども基金世話人、認定NPO法人沖繩・球美の里代表の向井雪子さんをお迎えしてお話をいただきました。被ばくから子どもを守るためにこれから避難を続けることを話された二瓶さん。保養活動を長くされてきた向井さんからは、球美の里に参加した子どもの「尿中セシウム測定値」が保養後に低くなることをデータで具体的に示していただき参考になりました。

また、「避難の協同センター」事務局長の瀬戸大作さんから短時間でしたが、避難当事者の生活実態が全く把握されないまま、退去を迫られる



トーク&映像 震災・原発避難者はいま Part4 原発被災者と保養のこれから

2019年2月9日(土)

18時30分～20時45分
会場/練馬区役所アトリウム
地下多目的室
(西武池袋線・西武有楽町線練馬駅
徒歩5分(西11)/都営地下鉄大江戸線
練馬駅 徒歩7分)
資料代/500円
(避難者・高校生以下無料)

ふたつの故郷を生きる

監督・撮影・編集: 中川あゆみ
撮影: 辻中伸次 松井至
プロデューサー: 平野まゆ
作品提供: テムジン
2018年/65分 日本/HD
福島第一原発事故後、子どものために夫を残し母子避難した人たちがいる。避難者のための住宅補償は2017年3月で打ち切れ、金銭面、精神面で疲弊する家族たち。健康被害だけではなく原発事故の闇が今また浮かび上がってくる。

二瓶和子さん
避難ママ自立支援自助
グループSnowDrop
代表/福島市から避難

向井雪子さん
チェルノブイリ子ども基金
共同代表/未来のふくしま
子ども基金世話人/
認定NPO法人沖繩・球美
の里代表

NPO法人
福島子ども保養プロジェクト@練馬

お問合せ・お申込み
hoyounerima@gmail.com
090-1253-3180 宮下
090-7637-8396 大城

▼ 本事業は歳末たすけあい運動募金を財源とした
練馬区社会福祉協議会の助成金を活用しています

ているという深刻な事態に対し、「原発避難者住宅問題」緊急ホットラインを開設して対応している現状をお話しいただきました。

雪がちらつく悪天候の中、55名の参加者が3人の方々の話に熱心に耳を傾けた貴重な時間でした。地元練馬以外に、千葉や神奈川、埼玉からの参加者もありました。

また若い世代の方の参加が比較的多かったことも嬉しい点です。講演会後のアンケートの中では「区域外避難者の生の声を聞けてよかった」「地元練馬で区域外避難者が身近に生活していることを映像から知れた」「避難者に対する住宅補償打ち切りはあまりにひどい仕打ちである」などの感想が寄せられました。

(伊丹 高)

主催: NPO 法人福島子ども保養プロジェクト@練馬

協力: チェルノブイリ子ども基金・未来のふくしま子ども基金・認定NPO 法人沖繩・球美の里

本事業は歳末たすけあい運動募金を財源とした、練馬区社会福祉協議会の助成金を活用しています。